

数学I 模擬試験問題 2014年5月14日(水)

- ・問題用紙 1枚、解答用紙 1枚、計算用紙 1枚
- ・なるべく、答案用紙の表に問題1と2，うらに問題3と4を解答してください。
- ・本やノートは見てかまいませんが、ほかの人と相談したりほかの人の答を写したりしてはいけません。

問題1 $-1 \leq s \leq 1, -1 \leq t \leq 1$ とする。

(1) $-1 \leq s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t \leq 1$ を示せ。

(2) $\sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} \geq st$ ならば $\arcsin s + \arcsin t = \arcsin(s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t)$ であることを示せ。

問題2 次のようにして $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$ を示せ。

(1) $n \geq 1$ を自然数とする。 $x > -n$ ならば $e^x \geq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$ であることを示せ。

$x < n$ ならば $e^x \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^{-n}$ であることも示せ。

(2) $0 \leq t \leq n$ ならば $1 - \frac{t}{n} \leq \left(1 - \frac{t}{n^2}\right)^n \leq 1$ であることを示せ。

(3) (1) と (2) を使って、すべての実数 x に対し $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$ であることを示せ。

問題3 $f(x)$ を閉区間 $[0, 1]$ で定義された関数とし、 $f(0) \leq t \leq f(1)$ とする。数列 (s_n) を、次の (i) と (ii) で帰納的に定める。

(i) $f\left(\frac{1}{2}\right) \geq t$ なら $s_1 = 0$ とおき、 $f\left(\frac{1}{2}\right) < t$ なら $s_1 = \frac{1}{2}$ とおく。

(ii) $n \geq 1$ とし、 s_1, \dots, s_n が定まっているとする。 $f\left(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}\right) \geq t$ なら $s_{n+1} = s_n$ とおき、 $f\left(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}\right) < t$ なら $s_{n+1} = s_n + \frac{1}{2^{n+1}}$ とおく。

すべての自然数 $n \geq 1$ に対し $f(s_n) \leq t \leq f\left(s_n + \frac{1}{2^n}\right)$ であることを、 n に関する帰納法で示せ。

問題4 $f(x)$ を开区間 (a, b) で定義された微分可能な関数とし、 (a, b) で $f'(x) \geq 0$ であるとする。

(1) $q > 0$ を実数とする。次の定理を $g(x) = f(x) + q \cdot x$ に適用して、 $a < s < t < b$ ならば $f(s) < f(t) + q \cdot (t - s)$ であることを示せ。

定理 $g(x)$ を开区間 (a, b) で定義された微分可能な関数とし、 (a, b) で $g'(x) > 0$ であるとする。 $a < s < t < b$ ならば $g(s) < g(t)$ である。

(2) u, v を実数とする。「任意の実数 $q > 0$ に対し $u < v + q$ ならば、 $u \leq v$ である」の対偶を求め、それがなりたつことを示せ。

(3) (1) と (2) を使って、 $a < s < t < b$ ならば $f(s) \leq f(t)$ であることを示せ。

略解 1 (1) $s = (s, \sqrt{1-s^2})$, $t = (\sqrt{1-t^2}, t)$ とおけば, $s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t$ は内積 $s \cdot t$ だから, その絶対値は $|s| \cdot |t| = 1$ 以下である.

(2) $\alpha = \arcsin s$, $\beta = \arcsin t$ とおくと, $\cos(\alpha + \beta) = \cos \alpha \cos \beta - \sin \alpha \sin \beta = \sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} - st$ である. $|\alpha| \leq \frac{\pi}{2}$, $|\beta| \leq \frac{\pi}{2}$ だから, $\sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} \geq st$ ならば $|\alpha + \beta| \leq \frac{\pi}{2}$ である. $\sin(\alpha + \beta) = \sin \alpha \cos \beta + \cos \alpha \sin \beta = s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t$ だから $\alpha + \beta = \arcsin(s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t)$ である.

2 (1) e^x は凸関数だから $e^x \geq 1+x$ である. よって, $x > -n$ ならば $e^x = (e^{\frac{x}{n}})^n \geq (1 + \frac{x}{n})^n$ である. $x < n$ ならば, $-x > -n$ だから $e^x = (e^{-x})^{-1} \leq (1 - \frac{x}{n})^{-n} = (1 + \frac{x}{n})^n \cdot (1 - \frac{x^2}{n^2})^{-n}$ である.

(2) $k = 2, \dots, n-1$ に対し ${}_nC_{k+1} \left(\frac{t}{n^2}\right)^{k+1} = {}_nC_k \left(\frac{t}{n^2}\right)^k \cdot \frac{n-k}{k+1} \frac{t}{n^2}$ である.

$\frac{n-k}{k+1} \frac{t}{n^2} \leq \frac{n}{1} \cdot \frac{t}{n^2} \leq 1$ だから, ${}_nC_{k+1} \left(\frac{t}{n^2}\right)^{k+1} \leq {}_nC_k$ である. よって, $1 \geq \left(1 - \frac{t}{n^2}\right)^n = 1 - n \cdot \frac{t}{n^2} + {}_nC_2 \left(\frac{t}{n^2}\right)^2 \pm \dots + (-1)^n {}_nC_n \left(\frac{t}{n^2}\right)^n \geq 1 - \frac{t}{n}$ である.

(3) アルキメデスの公理より, $|x| < m$ をみたす自然数 m がある. $n \geq m$ ならば $-n < x < n$ だから (1) より, $e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^n \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \leq e^x$ である. さらに $n \geq m^2 \geq m$ とすれば (2) より, $e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n}\right) \leq e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^n \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \leq e^x$ である. $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x^2}{n} = 0$ だから, はさみうちの原理より $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$ である.

3 $n=1$ の場合を示す. $f(\frac{1}{2}) \geq t$ なら $s_1 = 0$ だから, $f(s_1) = f(0) \leq t \leq f(\frac{1}{2}) = f(s_1 + \frac{1}{2})$ である. $f(\frac{1}{2}) < t$ なら $s_1 = \frac{1}{2}$ だから, $f(s_1) = f(\frac{1}{2}) < t \leq f(1) = f(s_1 + \frac{1}{2})$ である.

n についてなりたつとし, $n+1$ の場合を示す. 帰納法の仮定より $f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n})$ である. $f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) \geq t$ なら $s_{n+1} = s_n$ だから, $f(s_{n+1}) = f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) = f(s_{n+1} + \frac{1}{2^{n+1}})$ である. $f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) < t$ なら $s_{n+1} = s_n + \frac{1}{2^{n+1}}$ だから, $f(s_{n+1}) = f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) < t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n}) = f(s_{n+1} + \frac{1}{2^{n+1}})$ である.

よって n に関する帰納法により, すべての自然数 $n \geq 1$ に対し $f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n})$ がなりたつ.

4 (1) (a, b) で $g'(x) = f'(x) + q > 0$ だから, 定理を $g(x) = f(x) + q \cdot x$ に適用すれば, $a < s < t < b$ ならば $g(s) = f(s) + q \cdot s < g(t) = f(t) + q \cdot t$ である. よって, $a < s < t < b$ ならば $f(s) < f(t) + q \cdot (t-s)$ である.

(2) 対偶は「 $u > v$ ならば, 実数 $q > 0$ で $u \geq v + q$ をみたすものが存在する」となる. $u > v$ ならば, $q = u - v > 0$ は $u \geq u = v + q$ をみたすから, 対偶がなりたつ.

(3) $a < s < t < b$ とする. $q > 0$ を実数とし, (1) を $\frac{q}{t-s} > 0$ に適用すれば $f(s) < f(t) + \frac{q}{t-s} \cdot (t-s) = f(t) + q$ がなりたつ. よって任意の $q > 0$ に対し $f(s) < f(t) + q$ がなりたつから, (2) より $f(s) \leq f(t)$ である.